

岩井喜一郎氏について

国産ウイスキーの生みの親、竹鶴政孝氏。ウイスキー創生の幕開けは、大正7年当時勤めていた摂津酒造（阿部喜兵衛社長、岩井喜一郎常務（注1））が、氏をスコットランドに派遣することに始まります。大正9年（1920）11月帰国、日本人として初めてウイスキーづくりを学んだ竹鶴政孝氏が、上司であった岩井喜一郎氏に報告書代わりに提出したのが、今日の国産ウイスキーの原点となる「竹鶴ノート」＝ウイスキー実習報告書です。

しかし、摂津酒造では、第一次大戦の終焉に伴い戦後恐慌が始まっており、不況下、財政が苦しくなっており本格ウイスキー製造計画は中止になりました。ほどなく竹鶴氏は、摂津酒造を退社。その後、国産ウイスキー第1号の生産に携わるなど、「日本のウイスキーの父」として知られています。



岩井喜一郎氏（1883～1966）

一方で、岩井喜一郎氏は、大阪帝国大学工学部講師に就任（昭和9年～36年まで）、その間、同大生であった本坊蔵吉氏（昭和11年・卒、弊社元会長、岩井氏娘婿）が岩井氏に師事しており、昭和20年（1945）に岩井氏は、本坊酒造株式会社・顧問に就任、昭和35年（1960）にはウイスキー部門の計画を任せられ、「実習報告書」をもとに、山梨での蒸留釜をはじめとしたウイスキー蒸留工場設計と指導に携わります。こうして、マルスウイスキーは、「岩井喜一郎」氏の設計・指導により誕生しました。

注1.大阪高等工業（現、大阪大学）15期生であった竹鶴政孝氏は、摂津酒造へ入社の際、1期生として先輩であった、岩井喜一郎氏を頼って摂津酒造へ入社しています。

岩井喜一郎氏（1883年・明治16年生～1966年・昭和41年没） 主な経歴

- 明治35年 大阪高等工業醸造学科卒
- 明治42年 合資会社摂津酒精醸造所就任（後の摂津酒造）
- 大正9年 常務取締役兼技師長就任
- 昭和9年 大阪帝国大学工学部講師就任（昭和36年辞任）
- 昭和12年 摂津酒造常務取締役辞任
- 昭和20年 本坊酒造株式会社顧問就任
- 昭和35年 山梨工場におけるウイスキー製造プラント設計
- 昭和39年 日本醗酵工業会顧問就任

明治42年に、摂津酒造においてアルコール連続蒸留装置を考案し、岩井式アルコール連続蒸留装置としての地位を確立、明治45年に新式焼酎並びに、酒精含有飲料を全国に率先して製造開始、大正8年に合成清酒を開発、工業的大量生産の創始となった。